十年の歩みを顧みて

薗田　坦

京大・西洋近世哲学史懇話会を母体とするわれわれの雑誌『近世哲学研究』が、このたびめでたく第十号の刊行を迎えた。十年余前の創刊時前後のこと、そしてその後の十年間の歩みを思うとき、いささかの感慨をおぼえざるを得ない。

新雑誌の刊行への機運の高まりは、創刊号の「編集後記」にも記されているように、多くの会員諸氏からの時宜を得た内発的欲求によるものであったとともに、ともかくも研究発表の場を拡張する必要があるという外的な理由に基づくものであったと思う。しかしいずれにせよ、いったん刊行を始める以上、年一回のペースを守りつつ、この懇話会の存続する限り半ば永続的に刊行を続けること、そして内容的には少なくとも一定レベル以上の学問的水準と誠実をつねに確保し続けることが、当面の目指すべき目標として掲げられたのであった。

これらの目標は、少なくも本号に至るまでは十分に守られてきたと言い得るであろう。見方によっては、たかがまだ十号ということにもなろうが、確実に年一回のペースによる十年間の実績は、少なくとも今後の持続的継続を予測させるものであると見ることは許されよう。第二の点に関しても、これまで掲載された優に四十篇を超える諸論文および書評は、そのいずれもが執筆者諸氏の渾身の努力と熱意を窺わせる高

度な学術的成果とみなされてよいであろう。

昨今の時代的趨勢は、大学や専門研究に対する要請ないし要求において大きな変質をもたらしてきているように思われる。学問的探究における基礎的かつ本格的な研究の軽視という風潮は、残念ながら次第に強まり、即効的で実用的な問題解決への要求や、時流に乗ったトピックスへの傾斜という大勢は、ゆるぎなく進行しているようである。そして今やこうした風潮や大勢は、哲学や思想といった本来それらに左右されるべきでない分野と領域にまで及び始め、しかも加速的に拡がりつつあるようにも見える。

こうした情勢のもとでわれわれ懇話会メンバーに課せられているのは、主として西洋近現代の哲学的思想に関する確かな知見と洞察を獲得し、歴史と伝統に学びつつ自らの学的基礎を固める努力と研鑽を積むことではなかろうか。勿論このことは、何も時代の情勢を無視し、歴史的な現実の問題から目を背け、いわば内に閉じこもることを意味するのでは決してない。むしろそれは、かえってそのような現実の問題点を見すえる眼力を養い、それらを批判的に見通す洞察力を自己化するための努力に他ならない。哲学という学問は、もともとそうしたことを目指す営為であり、そのような性質の探究であると考えられるからである。

『近世哲学研究』が、先に述べた二つの目標に沿いつつ、今後とも愚直に、しかも意欲的に前進を続けていくことを念願しつつ、まずは会員諸氏とともに第十号の刊行を喜び、今後への期待をいっそう拡げたいものである。